

## 大自在

これほど理系らしくない人も珍しかった、と言ったら失礼か。原子核物理学の分野で優れた業績を上げ、東京大学長や文相として学術の振興に尽くし、改めて思う。

静岡文化芸術理事長の有馬朗人さんが亡くなった。90歳▼旧制浜松一中(現浜松北高)卒業まで浜松市に暮らした5年間、戦災で家を焼かれ、父を病気で亡くした。当時の苦学と終生の友情が、勉学の支えとなった。〈昏鐘(くらげ)や一打一打に散る銀杏〉。少年時代よく訪れた同市北区の方広寺に、有馬さんの句碑がある▼情景を飾らない万葉調は、同郷の賀茂真淵が万葉集研究から樹立した国学に通じる。論理的な物理や科学も、直感的な芸術も「出発点は同じ。自然は美しいという思い」。俳人協会賞を受けた俳人でもあった▼自分たちは、どんな環境の、どんな存在で、どこに向かおうとしているのか。「科学者は常に美しいものを探している」。現代に新しい「知」を生む電子情報研究しかり、「どの国、どの文化圏でも、同じ問題意識、方法論ということはない」▼文化芸術大の特別講演で、ノーベル物理学賞の日系米国人、南部陽一郎さんの理論を取り上げた。素粒子物理学などに用いる概念を芸術分野に絡めた。「対称性」を重視する欧州と、それを大きく破る日本を比べ、それぞれに違う成果の重要性を説いた▼自らの立脚点として、浜松への恩を忘れなかった。「やらまいか精神」の継承に、実学の府「遠州学林」の確立を目指した。後年記した座右の銘は「則天去私」。文理を超えて自然体の生涯だった。

2020.12.9